

最も聖なる信仰の上に

ユダの手紙 1:20-23

20.しかし、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。

21.神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに導く、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

22.ある人々が疑いを抱くなら、その人たちをあわれみなさい。

23.ほかの人たちは、火の中からつかみ出して救いなさい。また、ほかの人たちは、肉によって汚された下着さえ忌み嫌い、神を恐れつつあわれみなさい。

<導入>

ユダの手紙は 25 節という短い構成となっています。著者ユダで、彼は自分をヤコブの兄弟であり、キリストのしもべだと紹介しています。新約聖書のペテロへの手紙第二のように、ユダの手紙も偽預言者や偽教師について書いた内容です。

ユダは 3 節でのこのように言っているのです。「私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなた方に手紙を書こうと心から願っていましたが」この手紙は、イエスキリストを信じ受け入れている人たちに、書いた手紙であります。最初ユダは彼らが受けた救いについて書きたかったのですが、信仰の戦いを戦うように勧める必要性を感じたと言います。ユダは、この教会内にある一連の出来事に対して、かなりの危機感を感じていたようですね。

そして、「信仰のため戦うように」と勧め、その必要性についても書いています。「このようは人には、事にはさばきがある」と説明しながら書いています。このような表現は、この当時の教会に起きている事がいかに切迫して、危険で、教会全体を揺るがすものであるかを表しています。

彼はこの手紙の中で「信仰のための戦い」の必要性について説明して、また「どのように」戦うべきかについても語っています。今日選んだ箇所は、どのように戦うべきかについての内容です。まず、ユダが書いた信仰の戦いの必要性について一緒に見ていきましょう。

<一旧約聖書の三つ例>

ユダはこの必要性を説明するときに、旧約聖書の例を挙げています。このような人々の、このような行為には神の裁きがあったと、過去のことをおもい出させます。

5-7 節であげている例をみてみましょう。ここでは、3 つの旧約の出来事を述べています。一つ目は、神様が出エジプトから救いでしたが、神様を信じない者たちです。二つ目は、自分のいるべき所を捨てた御使いたち、三つ目は、ソドムとゴモラそしてその周辺の町の不自然な肉欲を追い求めたことを例として挙げています。

ユダヤ人にはあまりにもよく知られている出来事です。一つ目のことは神様が示された数々の御業の証拠があるにもかかわらず、それを信じない者たち、二つ目は神様が許可した領域から離れた者たち、そしてソドムとゴモラは欲望で創造の秩序を無視した者たちには最後の裁きがあると言っています。

これらは、神の権威や創造の秩序を信じず、無視して生きたものたちには裁きが必ずありますということで、教会はまず、神の権威、神の創造の秩序に基づいた集団でなければならないということを「裁き」ということを用いて、再認識させているようです。昔、旧約の時代、いや、創造が始まる前にあったこの原理は、この「救われた群れ」教会の基本であり、これらは必ず認めるべき事実であると言っているのです。

それから 11 節でユダはもう一回旧約の例を挙げます。最初の挙げた三つの例はイスラエルの民、天使たち、ソドムとゴモラなど、このように集団としての例です。次は一個人の行為の例をまた挙げています。

[ユダの手紙 1:11]

11. わざわいだ。彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに^{おちい}陥り、コラのように背いて滅びます。

カイン、バラム、コラの例です。これらもユダヤ人にとってはとてもよく知られている人物です。この三人の人物についてはもう少し詳しく見ていきましょう。

<三. カインの道、バラムの迷い>。

まずはカインです。カインがどんな人物か覚えているでしょうか？ 創世記に登場する人物ですね。自分の弟と神様の前にいけにえを捧げます。神様はカインのいけにえを受け取らなかったです、怒ったカインが自分の弟を殺してしまうそのような恐ろしい事件です。ユダの手紙では

「カインの道」と書いてありますが、具体的にカインの道とはどんなものを指しているのでしょうか？

[創世記 4:6,7]

6.主はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。」

7.もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。

神様はカインのささげものを受け入れなかったで、カインが怒っているときに神様が話した内容です。7 節で神様はカインに「もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。」という彼の間違いを指摘しているからです。また、これから彼がすべき行動も教えているのです。「罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」と言われるのです。非常に明確に、彼の過ちを彼に知らせ、またこれからすべきこと、つまり罪を支配しなければならないことを教えてくださっています。しかし、カインはこれらを受け入れず、罪を犯してしまうのです。

「カインの道」とは神様が期待される基準を明確に知っているにもかかわらず、それを受け入れない。自分が思うに正しいことをする。罪を治めないとけないと言われているけど、いや、そうじゃなくて大丈夫だと思う、大したことない、行動に移すことですね。

神様が絶対的な基準で私たちのこの世界を裁かれることを否定すること。知らないふりをすること、どう考えても自分の考えが合理的で正しい。つまり、真っ正面で神さまの言葉に立ち向かい、無視することです。それがカインの道ではないかと考えます。

それから、ユダはカインの道に続いて、バラムの迷いに陥ると書いてあります。この迷いとは何なのか、少し思い出してみましょう。バラムは民数記 22-24 章に登場する人物です。民数記でバラムのこの出来事は非常に長く取り上げています。

いつ起きた出来事かという、イスラエル民が 40 年の荒野生活を終えて、ついにカナン地の東の向こう側のモアブの地に到着しました。ヨルダン川を渡れば待ち望んでいたカナン地です。イスラエル民族は今までいろんな強い異邦人との闘いで勝利を収め、モアブの地まで来ていました。モアブの王は、イスラエルの民に警戒心を覚えて、武力ではイスラエルに勝てないと判断して、バラムの祈りでイスラエルを呪えばいけるのではないかと考えました。彼はバラムに、もし、イスラエルを呪うなら私はあなたに大金を与えると約束しました。バラム最初

[民数記 22:18]

「たとえバラクが銀や金で満ちた彼の家をくれても、私は私の神、主の命を破ることは、事の大小にかかわらず、断じてできません。

と言い、決してお金の前にひれ伏すことはないと言います。(信仰を守ります!)神様が彼の口に言葉を置いたり、彼の目の覆いを除かれて主の使いを見るようにもします。いろんな事を彼に見せて、「イスラエルを呪うことは神様が望んでいることではない」とはっきり何度も示します。しかし、彼はたびたび神様の願いに「はい、わかりました、その通にします」と言いながらも、「いや、あの山に行ったらまた別のことを言うかもしれない」等場所を移動しながら神様の言葉を待っているのです。

何を表しているかといいますと、「神様が言ったことばですから守らないといけない」「しかしお金も欲しい」。。。この二つの中で迷っているわけです。神様の言葉とみ旨ははっきりわかる。従わないといけないこともわかる、(これはカインと違うところですね)ですが、王から提示されたお金もほしいので、あの山言ったら、許すかもしれない、あそこに行って預言したらまた別のみ旨を示してくれるかもしれない、もしかしたら、この大金をもらうように許すかもしれない。の迷いです。

このストーリーの終わりのどうなったか、彼はイスラエルの民がモアブの女性と姦淫するように策略を立て、イスラエルの民が罪を犯すようにてしまいます。バラムの「欲」が「信仰」に勝ったのです。

しかも、バラムのこのような迷いはカインがしたことよりもさらに進んで、自分が神のみ旨と、言葉を逆らっただけではなく、人々に罪を犯させました。口では「主よ、主よ」と叫び、従うように見えますが、彼の欲が彼の信仰に勝ち、約束のカナンの地を目の前にしたイスラエルが彼のゆえに罪に陥ります。罪に陥った民たちはカナンの地に入れなくなってしまいます。

ユダはこのバラムの話を通して、当時の教会にもバラムのように利益に目がくらんでしまっ
て、信仰と欲の間で迷っている人、しかもリーダー(人に影響を及ぼすことができる)たちががい
ると言っているのです。口では「主よ、主よ」と叫びますが、欲に負けている人達を言っているの
です。

<四.コラの背き>

次はコラの背きです。コラは、荒野で起きた民数記 16 章の出来事です。歴史の順番としては、カイン、コラ、バラムであるべきですが、ユダはコラを一番最後に入れました。つまり、この三

人の中で最後のもの、コラの背きが最も深刻な問題であることを警告しているようです。

コラはレビ部族の子です。彼はモーセとアロンに不満を感じ、立ち向かってきた人です。

[民数記 16:3]

彼らはモーセとアロンに逆らって結集し、二人に言った。「あなたがたは分を超えている。全会衆残らず聖なる者であって、主がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは主の集会の上に立つのか。」

コラの背きは、一人ではないです。結集したと書いてありますが、

[民数記 16:2]

イスラエルの子らで、会衆の上に立つ族長たち、会合から召し出された名のある者たち二百五十人も、彼らと一緒にあった。

と書いてあります。これはリーダーたちの集まりです。「全会衆残らず聖なる者であって」と彼らいているのです。これは「聖なる」という概念の考えの間違いですね。この考え、理解の間違いはリーダーに染まってしまって、彼らはこの考えを基づき、一つになって、モーセに立ち向かっているのです。いや、神様に立ち向かっているのです。19 節ではコラは「コラは、二人に逆らわせようとして、全会衆を会見の天幕の入り口に集めた。」それから神様の判断を待つ場面です。皆を集めて神様の判決を待つということは、かなりの自信の表しではないかと思えます。しかも、「神様も私たちが正しいと認めてくれるでしょう」とう自身です。

これらの例を挙げながら、ユダは当時の教会でもこのように間違った考えを教えるリーダーたちがいると言いたかったのではないかと思います。

この三つの例はイエスキリストを信じる人であって、神様から見て間違えた、知りながらも、カインのように従わない者であり、「もしかしたら神の御心はそうではないかもしれない、別の御心があるかもしれない」と、バラムのように欲と信仰の間で迷う人たちだったのかもしれない。また、倫理と道徳という名目で神の秩序と「あずかっている救い」について追加的に要求し、間違えた教えを言っている人たちかもしれません。また、彼らは自分のあやまちを分からない人でした、

ユダの手紙 12 節には彼らは一緒に愛餐会に参加していると言っているわけです。自分が神

様の道から離れていることすら気づいてないのです。

明らかに彼らは大っぴらにイエス様を信じるなど言う人たちではないです。彼らは教会の中で交わりを持ち、集会に出席して、イエス様を信じると呼びかけています。しかし、実際は神に従わない者であって、利益を取る者であり、不平を言う者(神様の言葉に)であるとユダは明らかにしています。

<五. 聖なる信仰>

これらはある意味では目に見えない微妙な侵食です。微妙な信仰に対しての侵食です。では、教会はどうすべきかとユダは言いはじめます。

まず私たちの信仰をどこに立てなければならないかです。すなわち、最も神聖なる信仰の上に立つべきです。では、最も聖なる信仰とは何でしょうか

それは福音[人の意志に従ったものではない福音]です。人の集団的な想像や会議、理論から出てきたものではなく、人の倫理道徳から導きだしたのではなく、新しい神学の考え方、解釈の仕方でもありません。また人の考えを正当化するために、無理矢理に組み合わせられた聖書の言葉でもありません。

そもそも天地が創造される前からいる方、神様から出たものです。ですので、完全な完璧理解は難しいものだと思います。神様からでたのですから、人の理論で、考えで、理解できるわけではないです。

私たちは、最初福音を論理的に理解してここにいるわけではなく、信仰が与えられて信じるようになったわけです。そこから聖書に対しての理解を深まっているわけですね。その神様から出た福音を「受け入れ」て私たちはここにいるのです。その神様からでたものが [最も聖なる]ものであり、それは聖徒(私たち)を本当の正しい道に導くことができ、また聖なるものにする力があるのです。

旧約聖書では、聖なる神に属するものは何でも聖なるものであり、それを略奪したり、間違った方向に導いたものに対する神の裁きは色んな箇所を示されています。私たちは、その神様から出た福音に全判に(聖書全般)に対して敬虔かつ強い確信を持ち、愛する心で、その上に自分自身を建てないといけません。クリスチャンとして成長することは、私たちの人生において、その福音を基にしても、知性、行動、良心、動機、想像力が成長し、最終的にすべてが聖なる神様に一致していくことです。これは生涯にわたる活動です。

この一生涯にわたる活動を三位一体の神様の助けが必要だとユダは書いています。20.しか

し、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。21.神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに導く、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

と書いてある通りです。

先ほど少しお話した、カインの道、バラムまよい、コラの背きは知らずうちに私たちの信仰生活の中にも浸透してくる可能性がとてたかいです。知らず知らずのうちに迷いだすかもしれません。ですから、三位一体の神様の助けを求め、祈り、自分自身を保ち、哀れみを待つのです。

<六、憐れみ>

続けて、ユダは、私たち自身を神様から与えられた聖なる信仰の上に立たせてから、もしこのような危険な影響を受けている者に会ったら、彼らを助け、教えることを教会に求めています。非難したり、憎んだり、排除することではなく、憐れむようにと言っています。

私たちが憐れみを受けているものであると同時に、彼らも憐れみの対象であることを伝えています。

23.ほかの人たちは、火の中からつかみ出して救いなさい。また、ほかの人たちは、肉によって汚された下着さえ忌み嫌い、神を恐れつつあわれみなさい。

とあります。ある人には火という刑罰が待っていますが、教え、祈りなさいと伝えています。

また、「肉によって汚された下着さえ忌み嫌い、神を恐れつつあわれみなさい」という言葉は、間違ったことは間違ったと認識しなければなりません。憐れむということで、罪の基準を変えてはいけません。

下着まで憎みなさい、とは私たちが自分も知らずうちに「世の考え方、人からでた考えた、新しい神学」に染まってしまう可能性があることを認識して、それに恐れなければならないという意味ではないでしょうか。基準は常にまず聖書であり、次に憐れみです。

救いの条件がもっと下がれば悔い改めるのではないか。裁きがないと言えどもっと教会に人が集まるのではないか...もっと多くの人が悔い改めるだろうという思いから、罪の基準を勝手に変えることはできないとユダは言っているのではないのでしょうか？

私たちもユダが手紙を書いたその時と同じように、この「終わりの時」を生きる者です。18節でいったように、使徒たちが言ったあの話を覚えておくべき時です、最後の日に「**終わりの時に**

は、嘲る者たちが現れて、自分の不敬^{ふけいけん}度な欲望のままにふるまう。」と言っているのです。自分の欲のままに神様の言葉を捻じ曲げる人たちが出てくるはずですが、いや、手紙を書いたユダの時代に既に出ていますので、今の時代にもいると思います。

ただそれに恐れる必要はないです。ユダはユダの手紙の最後を祈りで終わらせています。「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方、

私たちの救い主である唯一の神に、私たちの主イエス・キリストを通して、栄光、威厳^{いげん}、支配、権威が、永遠の昔も今も、世々限りなくありますように。アーメン。」

あなたがたを、つまづかないように守ることができるかた、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方がいらっしゃるということです。唯一の神イエスキリストです。

<まとめ>

神様の言葉に逆らう、カインの道、信仰と欲の間で迷う、バラムの迷い、人から出た考えにみ言葉を合わせようとするコラの背きは私の中に知らずうちに潜んでいる神様への反逆かもしれません。

私たちは神様からでた福音に自分をたたせましょう。人から出たものではなく、新しい神学の考えでもない、天地が創造される前からいる方、神様からでたその「最も聖なる信仰の上に」自分自身を築き上げ神様によって建てられていきましょう。クリスチャンのこの「信仰のための戦い」には私たちを守り、立たせるイエス様が共にしてください。生涯の活動を通して、神様への一致、本当の意味での「聖なる」を身をもって学んでいきましょう。

お祈りいたします。

愛する天のお父様、あなたの御名をほめたたえます。今日は信仰のための戦いをするように勧めるユダの手紙と一緒にみていきました。

終わりの時を生きる私たち、私たちにも気づかないうちにあなたに向かったの背きがあったかもしれません。どうか憐れんで下さり、その背きからあなたに、あなたの言葉に立ち返ることができるように導いてください。あなたは「救い」という福音を与えてくださいました、このあずかった

「救い」の上に、

このあずかった「最も尊い信仰の上に」私たち建てられていくことを願います。どうか助けてください。

あなたが示す道に歩み、信仰の友のために、祈り、哀れみ、支える私たちとなりますように、に導いてください。

全ての期待して愛するイエスキリストの名前によってお祈りいたします。